2 松河戸の夏祭り

(1) 盛大な夏祭り

白山神社の祭礼の中でも、大きな祭りである夏祭り(祇園祭)がもうすぐやって来ます。

春日井市内でも松河戸の夏祭りは大変盛大なお祭りでした。

昭和 30 年代頃の資料をみてみると、**「天王はじめ」**から始まり、**「ちょうちん灯」**、**「雲霞祭」**、**「子どもタルオマント」**、**「祇園祭(オマント奉納)」**が行われ、そして**「提灯山」**で白山神社の夏祭りは終了します。

「祇園祭(オマント奉納)」には、各島で馬飾りを施し競い合ったものです。

また、**「提灯山」**では 365 個の提灯をかざり、天王さまに踊り(盆踊り)を奉納しました。

この 7 月の 2 週間は、松河戸の夏祭りとして盛大に行われていました。

現在の白山神社氏子会会則をみてみると、夏祭りの祭事として**「うんか祭」**、**「津島神社例大祭(祇園祭)」**、**「提灯山」**の記載があります。

今では、「雲霞祭」を兼ねて**「うんか祭（天王はじめ)」**が行われており、氏子総代が、町内入口 3 か所に笹竹飾りをつけて町内厄除けをしています。

【白山神社の祭事で現在行われている「うんか祭」とは、かつて行われていた「雲霞祭」とか「うんか送り、オンカ祭」の行事の事ではなく、「天王始め」として行われていた行事を行っています。】

平成 4 年夏祭り
夏祭りは、津島神社の例大祭であるため、幟は前に津島神社、後ろに白山神社の幟が立てられる。

また、「子どもタルオマント」と祇園祭に行われていた「オマント奉納」は無くなり、現在では、**「津島神社例大祭(祇園祭)」**には**「子ども獅子」**を行っています。

「ちょうちん灯」は、旧暦 6 月 8 日を挟んで 5 ～11 日に行っていましたが、いつしか「天王はじめ」の初日だけになり、これも平成 29 年を最後になくなりました。

「提灯山」は、祇園祭の 1 週間後に、天王様に 365 個の提灯を作り、盆踊りを奉納して盛大に行っていましたが、現在では規模を縮小して拝殿前に鈴蘭提灯を八の字に 60 個飾って参拝者を迎えていますが来所者が少なっています。

この様に、時代の移り変わりとともに夏祭りも簡素化され、今はかつての賑やかさはありませんが、「身や心を清めて、高温多湿なこの時期に病気などにかからないよう健康を願う」この祭りの本質は変わりません。

この機会に白山神社の夏祭りについて調べてみることとしました。

【松河戸白山神社の夏祭り】

昭和 30 年代	（祇園祭の1週間前）	旧暦6月 16 日	（祇園祭の1週間後）
	天王始め 雲霞祭(旧暦の 6 月中旬土用の 5 日後)	祇園祭(オマント奉納) (前夜祭　旧暦 6 且 14 日) (試楽祭　旧暦 6 月 15 日) (ほんやく旧暦 6 月 16 日) (山おろし旧暦 6 月 17 日)	提灯山(旧暦の 6 月 23 日)
	タルオマント　(旧暦の 6 月 8 日)		
	ちょうちん灯 旧暦の 6 月 8 日から 5～11 日間		
現　在	（祇園祭の1週間前）	第 3 又は 4 日曜日 (子どもが夏休みに入ってから)	（祇園祭の1週間後）
	うんか祭 (天王始め)	祇園祭(子ども獅子祭)	提灯山

※ 大正末期まで、麦わらで作った松明に火をつけ、田んぼ道を歩く壮観な「虫送り」を行っていた。
※「タルオマント」は、昭和 38 年を最後に、祇園祭に行われる「子ども獅子祭り」に代った。
※ 「雲霞祭」は平成 9 年から廃止となり、雲霞祭を兼ねて天王はじめに「うんか祭」が行われている。
※「ちょうちん灯」は期間が短縮されて、平成 29 年まで天王はじめの初日のみ行われていた。
※ 提灯山は昭和 30 年頃まで 365 個の提灯を飾り盛大に行われていたが、現在は 60 個程となった。
※ 祇園祭のオマント奉納は、昭和 37 年を最後に廃止となった。

(2) 津島神社例大祭

松河戸白山神社の祇園祭は「津島神社例大祭」として行っています。このことに疑問を持ち、祇園祭と関係のある「天王さま」、「須佐之男命」と「八坂神社」、「津島神社」について調べてみることとしました。

①「天王さま」と「須佐之男命」

「天王」とは本名を「牛頭天王(ごずてんのう)」といい、インドの「祇園精舎(ぎおんしょうじゃ)」の守護神と伝えられています。

・薬師如来の垂迹(すいじゃく)という「疫病から救う神」
　・「海の神」
　・「牛の角をもつ恐ろしい忿怒(ふんぬ)の鬼神」

この神が海を渡って日本に伝えられました。

6 世紀、我が国に仏教が伝来すると仏教を受け入れるための融合思想として「神仏習合」が唱えられ、平安初期に「本地垂迹(ほんじすいじゃく)」として定着して、「牛頭天王」は「須佐之男命(すさのうのみこと)」として現れたと考えられました。

では、なぜ「牛頭天王」は「須佐之男命」と同一視されたのでしょう。

古事記、日本書紀に「須佐之男命」は、イザナキ、イザナミから生まれた三貴神の一人で「海の神」、「荒々しいすさぶる神」であり、大蛇を退治した勇敢な姿が、仏法を守護し疫病を払う鬼神である牛頭天王と重ね合わされたと考えられています。

② 八坂神社の祇園祭

平城京、平安京など都市人口が増加すると疫病の発生が重大問題でした。

当時、疫病流行は死者の怨霊のなすところと考えられたため、御霊をまつる(御霊会)が盛んになりました。

祇園信仰はこれに基づくもので、平安京の八坂神社(祇園社)に牛頭天王が祭祀され御霊祭が行われるようになり、その祭りの華やかさから全国に広がっていきました。

③ 津島天王まつり(津島祇園祭)

尾張の津島神社は、諸国天王社の本社で全国に 3 千の分霊がある大社です。

神徳は、祭神が牛頭天王であれば当然、疫病の除厄と稲の害虫除けで、祭日は旧暦 6 月 15 日、16 日(現在は 7 月第 4 土、日曜日)で、農村各地に伝わっていきました。

津島天王祭りを津島祇園祭ともいわれるのは、祭神が祇園精舎の守護神牛頭天王であるからで、京都の祇園社から勧請されたという記録はなく、祭神が同じだからといって遷祀(せんし)したものではありません。

確かに祇園信仰は京都から地方に広まり、津島もその信仰の影響を受けて総社にまでなったのでしょうが、津島神社は元々「須佐之男命」を祀る神社で、牛頭天王を習合したと考えられています。

④ 松河戸白山神社の祇園祭

白山神社の祇園祭は、津島神社の津島天王まつりが伝わってきたものといえます。

これは、道下島にあった氏神社が、津島神社から「素戔嗚尊(すさのうのみこと)(牛頭天王)」を分霊し、津島神社(天王宮)と呼称していたことから分かります。(創立　慶長 11 年(1606)勧請　徇行記)

大正元年に国による 1 村 1 社合祀令により、松河戸の各島の 12 社(無格社)の祠を白山宮に合祀又は境内社とし、白山宮(白山神社)は、松河戸の「村社」となりました。

それまでは、白山の白山比咩神社の祭神の「菊理姫命(くくりひめのみこと)」一神でしたが、八ツ家島にあった八幡社の「応神天皇(おうじんてんのう)」、道下島にあった浅間社の「木花咲耶姫命(このはなさくやひめのみこと)」、それに津島神社(天王宮)の「素戔嗚尊(すさのうのみこと)」の四柱神を合祀しました。

松河戸白山神社の夏祭りは、この四柱神の一つである「素戔嗚尊(すさのうのみこと)」を祀る津島神社例大祭として、白山神社の祇園祭が行われてきました。

では、いつから松河戸白山神社の祇園祭は行われてきたのでしょう。

白山神社が村社に列せられた明治 5 年以降と考えられますが、少なくとも、「おまんと」など出して島ごとに競い合う派手なお祭りは、道下島にあった津島神社から「素戔嗚尊(すさのうのみこと)(牛頭天王)」が合祀された大正元年以降と考えられていました。

しかし、道下島の馬具収納箱には明治 5 年 6 月造之とあることから道下島ではこれ以前から行われていたと考えられます。

また門田島の白山社の馬具収納箱に明治 8 年 6 月 16 日の箱書きがあり、川原島の明治 19 年 11 月造之、八ツ家島の明治 23 年 6 月造之とあることから、白山神社が村社に列せられた明治 5 年以降各島でも行われはじめ、道下島にあった津島神社、門田島の白山神社を中心に「おまんと奉納」行われていたことが推測できます。

松河戸の祇園祭り時には、白山神社の鳥居の前に幟が掲げられますが、白山神社例大祭(秋まつり)には松河戸の「白山神社」の幟が前方ですが、祇園祭時には「津島神社」の幟を前方に立てられます。

(3) 松河戸の夏祭り(昭和 30 年代頃)

身や心を清めて、高温多湿なこの時期に病気などにかからないよう健康を願うお祭りです。

松河戸白山神社夏祭り(昭和 30 年代頃)の様子についてみてみます。

【松河戸の沿革　改訂版　9　信仰、習俗　(1)ムラ人のお祭り　②夏祭り(昭和 30 年代)】P214～ P218 から

① 天王はじめ

津島神社へ毎年祭礼の日に代表が参ってお札を受けて帰り、受けたお札は、悪霊などが入り込まないように、村境の道にささ竹に縄を張って下げ、これから天王祭りが始まる。

旧暦６月８日から「ちょうちん灯」が行われ、「祇園祭」の１週間前に、「雲霞祭」や「タルオマント」が行われた。

そして「祇園祭(オマント奉納)」、「提灯山」などの天王祭り(町内厄除け神事)が行われていく。

② 雲霞祭

田植えの直後に行われていた「虫送り」はズイ虫を駆除する行事で、麦カラで作った松明に、かがり火から火をとり、夕闇せまる田んぼ道を明々と松明が行き交う壮観な行事であったが、大正末期に廃絶した。

オンカ祭（うんか送り行事）
稲の害虫駆除の虫送り 正副区長と子供参加

「雲霞祭」は、うんか(ﾆｶﾒｲﾁｭｳなど)の虫害を防ぐことを祈って行われ、毎年旧暦の６月中旬、土用の５日後に行われた。

村の人たちは、当日の昼過ぎに白山神社に集まり、神主の祝詞、お祓いを受け、その後、子どもたちによるおんかの行列がお宮を出発し、「オンカの神オックリヨー」と叫ぶ子どもの声とともに村境を回り田のあぜ道をジグザグに進んで行った。

うんか虫送り行列のみなさん
昭和 60 年の第９回春日井まつりに参加時。

行列の順番は、「かね」、「太鼓」、「鳳凰」、「斉藤別当実盛のつくりもの」、「宇賀神」、「五穀豊穣」、「村内安全」の３本の幟がつづいた。

最後にこれを捨てる場所は、２か所あった。

東は中切との境の庄内川堤防、西は町田のおんか塚である。

毎年どちらに収めるかは、その年の豊作占いと合わせて決められたが、それは区長宅でつくりものに精を入れる際に、区長がますの中から取り出す豆の数が偶数か奇数かによって決められた。（大正の耕地整理後は村境の西の塚が消滅したので、東の　庄内川堤防になった）

「雲霞祭」は平成８年度まで行われていたが、区画整理が進むにつれ水田が少なくなったことから９年度から廃止され、現在は「天王はじめ」に、「雲霞祭」を兼ねて、「うんか祭」として、氏子総代が、町内入口３か所にささ竹飾り付けをして町内厄除けをしている。

③ タルオマント

祇園祭の１週間前に、天王祭として旧暦の６月８日タルオマント(小学生男子の祭り)が行われた。

午後になると村の人達は農作業を休み、島の祭りの宿に集まって飲食し、子どもたちは「やれこれやれこれ、八反田のせきが切れたぞよ、樽のせんも抜けたぞよ。」と唄いながら島を歩いて回った。

昭和 34 年頃　のタルオマントの子ども達
個人蔵

やがて大人たちの手で、麦わらで作ったタルに笹竹飾りのタルオマントができると、手ぬぐいで鉢巻きをし、腰に力紙を付けて「ヨイサーヨイサー」とみこしを担いで、島ごとに設けられた宿参りをした。

宿では、子ども達に、スイカやきうり、カボチャの煮つけなどをふるまった。

宿を何度も回った後に、白山神社へ行き、社殿の周りを３周して本殿の西にある各島の境内社にタルオマントを納めた。

タルオマントは、昭和 38 年まで続いたが、昭和 39 年から子ども獅子祭り(獅子かぶり)に代わり、子どもが夏休みに入る新暦の７月の第３か４日曜日(祇園祭り)に行われている。

▲祇園祭の７日前に行うタルオマント
これは小学生のお祭り

昭和 38 年　タルオマントが終り各島の末社に納める
最後のタルオマント

平成元年
ハッ家島宿の皆さん

「タルオマント」に替わる「子ども獅子」

「タルオマント」は祇園祭の７日前に行っていたが、「子ども獅子」は祇園祭に行っている。

④ 祇園祭(オマント奉納)

京都八坂神社の祇園祭が有名で、健康願う夏のお祭りとして全国で行われているが、松河戸白山神社では津島神社例大祭として行われている。

松河戸では祇園祭の際、オマント奉納(馬の塔奉納)が 6 島(のち 5 島)ごとに企画され、古くから行われていたが、青年会の解散、馬の入手困難などの理由により、昭和 28 年頃より簡略化され、昭和 37 年を最後に廃止になった。

現在は、神事のみ行われ、祭礼奉納行事は「子ども獅子」祭に移行している。

(祭礼1週間前)

大若衆によって、祭礼前 7 日頃までに馬主に内諾を得ると、酒肴(しゅこう)を持参して馬借りを契約する。

馬の塔を出す家を宿と称し、島中輪番でつとめた。

祭礼の 3 日前までに、宿の印を書いた提灯をつけて、宿の目印として掲げる。

▲祇園祭で道風公園南の県道を走る馬

(旧暦の 6 月 14 日　前夜)

それぞれの宿に、島の人が総出で集まって、馬林(だし)が作られた。

午の背にきれいな「ばれん」が掛けられ、「ばりん」という 5 尺ほどの竹を割ってこれに紅白の和紙を巻き、上から赤･青･白の紙の房を付けたものを 50~60 本作り、扇状に鞍の上のまきわらに刺し馬を飾った。

このだしは古い島と新しい島では、色や形が異なっていた。

▲昭和30年代前半頃の祇園祭の宿回り

(旧暦の 6 月 15 日しんやく) 試楽祭

午後、各島より飾馬を出し、八幡社に集合し、その後、白山神社まで行列を行った。

行列の順番は、毎年決まっていて、はな馬は道下島、その後に中小路、門田、八ツ家島、川原島、中島と続いた。

お宮に到着すると、本殿の周りを 3 回周り、馬をつないだ後、神主の祝詞、お祓いがあった。

帰りは、互いに「あばよ、あばよ」と声を掛け合い、往とは逆にそれぞれの宿に戻った。

昭和 37 年寅年　旧暦6月 16 日
馬ノ塔奉納終祭記念写真

(旧暦の 6 月 16 日ほんやく)

午前は前日の繰り返し、昼からは祭りの余興として、道風公園前の直線コース(本道)で馬を放し、「おっぱ」といって全力で走らせた。

その後、宿に戻り馬洗いをすませた馬は若衆全員で村はずれまで送り、馬は鈴を鳴らしながら馬主にひかれて帰った。

夜は提灯を持って宿まいりが行われた。祭りの中心となった青年会が提灯を持ち、ワッショイ、ワッショイと村中を練り歩き、有力者の家々をまわって祝儀を集めた。

（旧暦の 6 月 17 日山おろし）

祭礼道具の一切の後片付けをし、馬林は一本ずつ氏子の各戸に配られる。

午後は宿からご馳走が出て、夕方になって、神社の幟がおろされ、これで松河戸の祇園祭(オマント)はすべてが終了した。

昭和 35 年度の馬借り　オマント（馬の調達状況）

この年の馬の塔奉納は、ほんやく(7 月 9 日、旧暦の 6 月 16 日)のみ行われている。

オマント奉納は、昭和 27、28 年頃より簡略化された。

	馬方住所	身長	年齢	毛色	産地
河戸島	名古屋市東区芳野町	5 尺 2 寸	8 歳	芦毛	北海道
門田島	春日井市篠木町	5 尺 1 寸	11 歳	青色	北海道
八ツ家島	春日井市上条町	5 尺 2 寸	6 歳	栗毛	木曽福島
川原島	春日井市牛山町	5 尺 1 寸	8 歳	かげ色	―
中島	春日井市鳥居松町	4 尺 8 寸	12 歳	青色	木曽福島

※　借馬のお礼　4,500 円　（川原島、八ツ家島の場合）

最後のオマント　昭和 37 年
宿で記念写真　八ツ家島のみなさん

現在、祇園祭に行われている「子ども獅子祭り」　令和元年 7 月 21 日

松河戸公民館へ子ども達が集合して、町内ごとに獅子をかぶって白山神社まで練り歩きます。
そこで安全祈願のお祓いを受けて再び公民館へ、お菓子を受取って解散します。
公民館から白山神社へ出発するところ。

※ 町内会ごとに宿を設けることが困難になり、公民館が各町内会の宿となった。

▲春日井まつり　松河戸子ども会子供みこし

春日井まつりにて、子ども会が、「おまんと」を再現している。

⑤ ちょうちん灯

旧暦 6 月 8 日から 5～11 日、子どもが「ほおずき提灯」を灯し、親子連れで夕暮れ神社へ参拝した。

薄暗くなると各家から提灯を持った家族連れが神社へ向かった。

提灯が揺れながら動いている様子は美しく、子どもにとっては結構スリルがあり、帰りには「しげさ(角屋商店)」でかき氷を食べるのが楽しみであった。

昭和末頃まで行われていたが次第に来所者が少なくなったので期間を短縮した。

平成 29 年まで天王はじめの初日のみ、氏子総代が参拝者を迎えていたがそれもなくなった。

⑥ 提灯山（旧暦の 6 月 23 日 ）

祇園祭の 1 週間後に、天王様に 365 個の提灯山を作り、おどりを奉納した。

青年団を中心に準備が進められ、夕方から夜遅くまで踊りを楽しんだ。

境内には露天商も出店し昭和 30 年頃まで盛大におこなわれていたが、次第に縮小して今は神社の総代、年行司の人達が、拝殿前に提灯を八の字に 60 個程飾って参拝者を迎えているが、来所者は少なくなった。

これで オンカ祭(天王はじめ)から始まった夏祭りは全て終了した。

⑦ 祇園祭(おまんと)の馬道具

使用されていた各島の馬道具については、貴重なものなので白山神社の社務所に保管されており、毎年の夏祭りの最後になる提灯山祭事に、白山神社総代、年行司の人達が日陰ぼしを行って提灯山の来所者(提灯山の始まる前)にみてもらっている。

いつでも復活できるよう大切に保管されている。

▲拝殿の幕（八ッ家島）

▲だし台の飾り　衣馬のはなあて　轡（くつわ）

▲明治42年　だし台（左）　馬のくら（右）（川原島）

▲だし巻「義経の八艘とび」

▲馬の尻飾り「義経の八艘とび」

▲馬の胴衣「騎馬武者」源平合戦図

▲新旧の馬道具（川原島）

写真と図で見る松河戸　松河戸誌研究会　平成28年

松河戸文化科学探求隊
隊長　長谷川 浩
080－3657-7052
松河戸町の沿革ホームページ
http://matsukawado.com/